言葉の開示力と詩の授業

——ハイデッガーに基づく解明の試み——

学校教育学研究室　田　端　健　人

Die Kraft der Worte und der Gedichtsunterricht

——Der Versuch einer Erörterung nach Heidegger——

Taketo TABATA

Diese Abhandlung zielt darauf ab, anhand Heideggers zu erörtern, wie Kinder und ein Lehrer ein Gedicht im Unterricht erfahren.

Heideggers Gedichtsinterpretation zufolge, gibt es zwei Möglichkeiten ein Gedicht zu erfahren : die "Vorstellung" des Lesers und sein "Nachdenken" über das Gedicht.

Man kann davon ausgehen, daβ die Kinder diese Erfahrung währnd des Gedichtsunterrichts erleben. Diese Abhandlung geht auf die Fragestellung des Lehrers und die Antworten der Kinder währnd des Unterrichts, dessen Gegenstand Bashos Haiku ist, ein, und beschreibt konkret die Erfahrungen der Kinder.

Der Lehrer regt die Kinder währnd des Unterrichts zum Nachdenken über das Haiku an, indem er fragt "wo ist der Dichter wohl", weil diese Frage die Kinder Nachdenken zu drängen vermag.

Der Zusammenhang zwischen dieser Frage und dem Nachdenken über das Haiku wird durch den Dialog der Kritiker über das gleiche Haiku beleuchtet.

Daraus kann geschlossen werden, daβ die Kinder durch die Fragestellung des Lehrers und das Nachdenken über das Haiku, zu dem sie angeregt wurden, ihre eigene subjektive Welt zu überschreiten vermögen.

目　次

はじめに
Ⅰ．詩作についてのハイデッガーの思索
Ⅱ．言葉の開示力と物の現われ－俳句の授業に即して－
　A．子どもの表象の多様性
　B．俳句の言葉と読み手の経験
Ⅲ．詩に従って思索すること－評者の対話に即して－
　A．俳句の成立過程
　B．評者の経験
おわりに

はじめに

本稿の課題は，詩を教材とした授業において子どもや教師が，授業の中で如何なる仕方で詩を経験しているか，また授業を通して詩の経験の仕方が如何に変化するかを考察することである。本稿ではこの課題を，詩人の詩作における経験，詩作された詩の言葉や世界，との一連の連関において考察することを試みる。

この課題を遂行するために，まず，詩作における詩人の経験そのものを解明することが必要となる。本稿では，詩作における詩人の経験そのものを詩にしているゲオルゲ（S. George）の或るひとつの詩に注目し，この詩についてのハイデッガー（M. Heidegger）の思索を導きとすることによって，詩作における詩人の経験を考察する。

次に，松尾芭蕉の俳句を教材とした斎藤喜博による授業の文字記録を取り上げ，この授業における子どもや斎藤の経験を，彼らの言葉に即して記述することを試みる。この試みによって，芭蕉の俳句についての子どもの経験と斎藤の経験との違いが明らかになる。さらにこの試みによって，斎藤が子どもたちと共に，この俳句に従って思索し，この俳句を創作せしめた芭蕉の経験へと遡ろう

としていることが示唆される。

最後に，この示唆を受けて，芭蕉のこの俳句に従って思索することが，具体的に如何にして可能になるのかが，斎藤の問いやさらにこの俳句についての安部能成，太田水穂，小宮豊隆，そして和辻哲郎といった評者の対話を手がかりに考察される。

Ⅰ．詩作についてのハイデッガーの思索

ハイデッガーは，『語（Das Wort)』と題された講演論文において，ゲオルゲの同名の詩『語(Das Wort)』[1] を取り上げ，この詩に「従って思索する(nachdenken)」[2] という仕方で思索している。「…に従って思索する」と訳された原語は，nachdenkenである。辞書によれば，ドイツ語のnachdenkenとは，「或る事を熟考する」「思案する」という意味と，「或る人の考えの跡をたどる」という意味をもつ[3]。nachdenkenは，「後から」「追随」を意味する前綴りnach-と，「考える」「思索する」を意味する語幹denkenからなる。したがって，詩に従って思索するとは，何らかの理論に基づき詩を解釈したり批評したりするのではなく，また詩人の生い立ちや私生活や精神状態に即して詩を解釈したりするのではなく，詩作されたものに従って，詩人の詩作の跡をたどるような仕方で思索することである。

ハイデッガーが明らかにしているように，ゲオルゲの『語』と題された詩では，詩作における詩人の経験が詩作されており，しかも詩人のこの経験は旅として詩作されている。

経験を旅とみなすことは，「経験」を意味するドイツ語のErfahrungに注目するならば理解できる。ドイツ語のErfahrungは，動詞erfahren（経験する）の名詞形である。erfahrenは，「内から外へ」「開始」「発生」を意味する前綴りer-と，「(乗り物に乗って）行く」「旅する」を意味する語幹fahrenからなる。また，日本語の「旅」「遍歴」にあたるドイツ語はFahrtであり，この語は動詞fahren（行く，旅する）に由来する。したがって，Erfahrung（経験）というドイツ語の成り立ちに注目するならば，何かを経験すること（Erfahren）は，旅(Fahrt）に出て（er)，その旅の途上で何かに出会うことを意味することになる。

ハイデッガーは，ゲオルゲの詩に従って思索することによって，詩作における詩人の経験には，根本的に異なった二つの種類の経験があることを明るみにもたらす。つまり，詩人の詩作には，詩作する詩人の経験に応じて，二つの種類の詩作があるとされる。本稿ではハイデッガー自身がそう名づけているわけではないが，この二つの種類の詩作を区別するために，この二つの種類の詩作をそれぞれ，「表現としての詩作」と「歌としての詩作」と名づけることにする。そして本稿では，「表現としての詩作」に注目し，この詩作における詩人の経験をハイデッガーに基づき考察することにする。

ハイデッガーに従えば，表現としての詩作において詩人は，「遠き彼方の不思議」また「夢」に「名前（Name)」を与える[4]。詩人は，「遠い彼方から驚くべきものとして詩人に伝えられたもの」や「夢の中で詩人に訪れたもの」，すなわち「詩人自身を真に襲ってくるもの（das dem Dichter wahrhafr Angehende)」に名前を与えるのである[5]。「襲ってくるもの」と訳された原語は，das Angehendeである。ドイツ語のangehenは，「接近」「接触」を意味する前綴りan-と，「行く」を意味する語幹gehenからなり，angehenは，「立ち向かう」「接近する」「襲撃する」「関係する」といった意味をもつ。そうすると，詩人は，表現としての詩作において，詩人へと真に接近し，立ち向かって襲ってくるものに名前をつけることになる。

この場合，「襲う」とは，何か或るものが，別の或るものへと過度の速さで接近することではない，例えば，犬が人を襲うという意味での「襲う」ことではないことは明らかであろう。また，何らかの目的をもって実践的に活動している日常的で素朴な態度における我々にとって，日常的に見慣れている事物は我々を襲ってくるわけではない。むしろ，日常的には，我々自身の方がそれらの事物に能動的に働きかけ，それらの事物を観察したり利用したり加工する。さらに，我々が，事物を対象化し精密に分析するという意味でのいわゆる客観的な学問研究の態度をとる場合には，対象化された事物は，我々を襲ってくるわけではない。したがって，詩人を真に襲ってくるものは，日常的で素朴な態度，あるいは客観的な学問研究の態度においてはとらえられないことになる。

日常的で実践的な態度からも，客観的な態度からも身を引く場合として，次のような例が考えられる。冬の或る朝，寝床から起き出て，部屋のカーテンを開けると，田畑から山々に至るまで一面が初雪に覆われており，はっとするような瞬間がある。この瞬間には，いつも見慣れている風景は，驚くほど新鮮な風景として，見る者の目に飛び込んでくる。ハイデッガーの言葉で述べるならば，このときの風景は，「この上もなく魅惑的」なものとして，見る者を不意打ち的に「乗り越え圧倒する(überkommen)」[6]。すなわち，このとき，見る者は，ハイデッガーのいう意味で，風景に襲われていると考え

られる。

さらに，詩人は詩人自身を真に襲ってくるものを，「自分の胸のうちにおさめておく」のではなく，それに名前を与え，それを「表現し（darstellen)」ようとする[7]。

「表現する」と訳された原語は，darstellenである。ドイツ語のdarstellenは，「表現する」という意味の他に，「眼前に見せる」「描写する」「叙述する」という意味をもつ。darstellenは，「提出」を意味する前綴りdar-と「立てる」を意味する語幹stellenからなる。darstellenという語のこうした成り立ちに注目するならば，darstellenは，提示し（dar）立てる（stellen）ことを意味することになる。詩人は，詩人自身を襲ってくるものに名前を与えることによって，その襲ってくるものを我々詩の読み手に向かって提示し－立てる（dar-stellen)，すなわち表－現する（dar-stellen)。このことを「名前」に注目して言い換えるならば，名前は，詩人を真に襲ってくるものを詩人自身にあるいは我々に提示し，表現する。ハイデッガーはこのような働きをする語を，「表現する語（darstellende Worte)」[8]と呼ぶ。

詩人によって名前が与えられることによって，詩人を真に襲ってくるものは，「つかみ得る（greifbar）ものにされ，ぎっしりとした（dicht）ものにされる」[9]。詩人を真に襲ってくるものは，それに名前が与えられない間は，つかみ得ないようなもの，奇妙で不可解なもの，あるいはすぐさま消え去ってしまうようなものであるが，語が与えられることによって，つかむことのできるものになり，ぎっしりとしたものにされる。

「ぎっしりとした」と訳された原語はdichtであり，dichtは，英訳版では，full of being（存在に満ちて）と訳されている[10]。このことから，表現する語は，既に存在するものを我々に開示し，このことによって既に存在するものをつかむことができるようにし，いっそう存在感のあるものにするとみなすことができる。また，この場合の「つかむ」は，実際に我々の手でつかむということではない。そうではなく，「つかむ」は，例えば認識や想像の対象として認取すること（Vernehmen)，あるいはそれを観察すること，操作すること，また他者に伝達することを可能にすることである。

詩人を真に襲ったものは，名前が与えられることによってつかみ得るものにされ，ぎっしりと存在感に満ちたものにされ，その結果，「将来にわたって輝き，花咲き，そのようにして国のいたるところで美しいものとして支配する（herrschen)」[11]ようになるとされる。この引用における「輝く」や「花咲く」という語は，ゲオルゲの『語』と題された詩の中で用いられている語であるが，これらの語が何を意味するのかを解釈することは難しい。おそらく，これらの語が意味することは，それまでは我々によってそもそも気づかれることのなかったものや我々によってその美しさに気づかれることのなかったものが，詩人によって名づけられ，つかみ得るものにされることによって，我々に気づかれ，美しいものとみなされるようになることではないだろうか。さらに，それまでは気づかれることのなかったものが，或る詩人によって名づけられることによって，当の詩人自身や当の詩人以外の人々によって，通俗的なものを越えた美しいものとして，いっそう豊かに展開されることではないだろうか。

ここで，上記の引用文において「支配する」という語が用いられていることに注目しておきたい。ハイデッガーは，「名前は，表現する力によって，物（Ding）に対する標準的な支配（Herrschaft）を確立する」[12]とも述べる。「支配」と訳された原語Herrschaftは，Herr（主人）に由来し，或る人や或る物の主人となり，その人や物の自由を奪うような仕方で支配することを含意している。したがって，詩人を真に襲ったものは，語の表現する力を通してつかみ得るものにされ，美しいものにされると同時に，語によって支配されることにもなり，それはもはやかつて詩人を真に襲ったような仕方で我々を真に襲うことはなくなる。それゆえ，我々の方は逆に，表現し支配する語のおかげで，襲ってくるものに身をさらす危険から守られ安全にされることになる。我々は，表現し支配する語のおかげで，かつて詩人を真に襲ったものを美しいものとして，ある種の安心感をもって享受することができるようになるのである。

しかも，表現する語は，既に存在するものを「表象すること（Vorstellen）へと立て渡す（zustellen)」[13]。「表象する」と訳された原語vorstellenは，「前に」を意味する前綴りvor-と，「立てる」を意味する語幹stellenからなる。それゆえ，vorstellenは，既に存在するものを我々自身の前に立てることを意味する。例えば，vorstellenという語が日常的に使われているときに意味されているところの，何らかの事物をイメージ（Bild）として我々の眼前に思い浮かべることばかりではなく，何らかの事物を知覚や認識の対象とすることなども，表象すること（Vorstellen）にあたる。我々は，語によって表現されたものを，襲われるという仕方ではなく，前に（vor）立てる（stellen）という仕方で，すなわち表－象する（vor-stellen）という仕方で経験するのである。

また，先の引用文において「立て渡す」と訳されたzustellenという語は，「授与」を意味すると同時に「閉

鎖」を意味する前綴りzu-と，「立てる」を意味する語幹stellenからなる。それゆえ，zustellenは，「手渡す」「立て（stellen）渡す（zu）」ことを意味すると同時に，「塞ぎ（zu）立てる（stellen）」ことをも意味し得る。そうすると，既に存在するものを表象することへと立て渡すということは，同時に，その存在するものによって我々の眼を塞ぎ立てることでもある。すなわち，表現する語は，表現されたものを我々の前に（vor）立てる（stellen）と同時に，我々にとっての事物の現われの場（Da）を塞ぐのである。表現する語を通して我々が表象するとき，我々は表象されたものに目を奪われてしまう。そして，詩人を真に襲ったところの事物は，もはや襲うという仕方で我々に現われることはなくなるのである。

Ⅱ．言葉の開示力と物の現われ－俳句の授業に即して－

A．子どもの表象の多様性

前章では，ゲオルゲの詩をハイデッガーに基づき解釈することによって，詩作における詩人の経験と詩の言葉との関係，さらに詩人の経験あるいは詩の言葉と詩の読み手の経験との関係が考察された。この考察に基づき，本章では，詩を教材とした授業における子どもや教師の経験を考察する。本章では，松尾芭蕉の俳句「五月雨をあつめて早し最上川」を教材とした中学二年生のクラスでの斎藤喜博による授業[14]を取り上げる。

芭蕉の俳句を教材とした斎藤による授業の前半で，斎藤は子どもたちに，「『さみだれをあつめてはやしもがみがわ』をどこでみていると思う。作者はどこでみていると思う。どういう場所でみていると思う」[15]と問う。「作者はどこにいるか」という問いは，詩を教材とした授業において斎藤がしばしば子どもたちに問う問いである[16]。

斎藤のこの問いに対して或る子どもは，「たとえば，東海道なんかの大井川で，舟を待って川のそばの旅の宿なんかに泊められているわけですよね」[17]と答える。斎藤はこの子どもの言葉を受けて，「ははあ，宿から見ている」[18]と確認する。子どものこの言葉では，「東海道」「大井川」という名前が述べられているが，芭蕉の俳句で表現されているのは，「大井川」ではなく「最上川」である。このことから，子どもはいまだこの句の表現する言葉に従って表象しているわけではないと考えられる。さらに，子どもが述べている，「舟を待って川のそばの旅の宿かなんかに泊められている」ということは，この句で明示的に表現されているわけではない。むしろこの子どもは，例えば江戸時代に大井川には橋が架けられておらず，雨で増水すれば大井川を渡ることはできなかったという，世間一般で通用している常識に基づいて表象していると考えられる。このことは，子どもの言葉を受けて斎藤が，「なるほどね。宿で…早く大井川あかないかな，水がひけて，むこうへ渡れないかなと宿で見ている」[19]と述べていることからもうかがわれる。

そこで斎藤は，別の子どもを指名する。指名された子どもは，「私もそういうふうで，あんまり近くで見ているんじゃなくて，あんがい遠くでみている」[20]と答える。この子どもは，芭蕉が川から「遠く」離れた場所にいるとみなしている。子どものこの言葉を受けて斎藤は，「阿武隈川のそばの人が，五十メートルくらいのところ，家があって，その家の二階から見ているというのでもいいわけね」[21]と述べる。子どもの表象が，斎藤が述べているとおりであるとするならば，この子どももまた，いまだ句の「最上川」という言葉に従って表象しているわけではなく，子ども自身の知識や推論に基づいて表象していることになる。

次に斎藤は，既に述べられた子どもの意見とは異なった意見がないかどうか，子どもたちに尋ねる。すると，或る子どもは，「私は家のなかではなくて，川のほとりなんだけど，そんなに近くではなくて，傘でもさしているみたい」[22]と答える。この子どもは，芭蕉が「川のほとり」にいるとみなしている。また，「傘でもさしているみたい」と述べていることから，この子どもは，雨が降っている情景を表象していると考えられる。この句によって表現される情景の中で雨が降っているということや，芭蕉が傘をさしているということは，この子どもの発言以前の子どもたちの言葉においては主題的にはとらえられていなかった。したがって，子どもに表象される情景の中で芭蕉のいる位置が移動することによって，子どもの表象には，それまで現われていなかった事物が現われるようになることがわかる。

斎藤はさらに，子どもたちに別の意見を述べるように促す。すると次の子どもは，「橋の上で，傘でもさして」[23]と答える。この子どもの表象において芭蕉は「橋の上」にいるとされる。また，「傘でもさして」と述べていることから，この子どもが表象している情景の中でも，雨が降っていることになる。さらに，この子どもの表象では，橋が現われている。

これらの子どもたちの言葉に対して，斎藤は，「舟の上というのはないかな。舟の上。舟の上ない？…ありうるんだね。舟の上，舟に乗っているんだ」[24]と述べる。

以上から明らかなように，子どもたちの表象において

芭蕉のいる位置が「川のほとり」から「橋の上」さらに「舟の上」へと移動することによって，子どもたちの表象は多様になっている。

だが，芭蕉はどこにいるかという斎藤の問いは，子どもたちの表象を多様にするばかりではない。むしろ，斎藤のこの問いは，芭蕉の俳句についての子どもたちの経験そのものを変化せしめるものであると考えられる。上記の場面に続くこの授業の展開において，芭蕉の俳句についての斎藤の経験と子どもの経験との違い，さらに斎藤が授業の中で子どもたちの経験に如何に働きかけ如何に変化せしめようとしているかが，いっそう明瞭になる。

B．俳句の言葉と読み手の経験

芭蕉はどこにいるかという問いをめぐる一連のやり取りの後，斎藤はこの句で表現されている情景の中で雨が降っているかどうかを問題にする。子どもたちは，雨が降っているとみなしている[25]。そこで斎藤は，「『あつめて早し』の，この感じを言ってください」と述べ，「『あつめる』って，何あつめているの？」と子どもたちに問いかける[26]。この問いかけを受けて，子どもは，「さみだれ」[27] と答える。斎藤は，子どものこの答えを，「天から降ってくる雨をあつめている」[28] と解釈する。

子どもたちと斎藤との以上のやり取りに従えば，子どもたちの表象においては，五月雨は現に降っており，現に降っている五月雨を最上川が直接受けていることになる。つまり，子どもたちに従えば，俳句の『五月雨をあつめて』という言葉は，現に降っている五月雨が最上川に直接降り注いでいることを表現していることになる。子どもたちが表象していると考えられるこうした情景は，実際に川のほとりや橋の上に身におくならば感性的に知覚され得る情景であり，日常的で素朴な態度における我々にとってはいわば見慣れた情景である。

他方，斎藤は，句の「あつめて早し」という言葉について，「山にある木に雨が降ってたまったり，土にたまったりして，それが沢にあつまってくるでしょ。それが川の支流に集り，だんだんと大きな川にはいってくる」[29] と述べる。

斎藤の表象においては，子どもたちの表象においてとは異なり，最上川の周囲の山々が表象され，五月雨は川に直接降り注ぐばかりではなく，山や山の木や草や土にも降り注ぎ，木の幹や草の葉を伝って土にたまり，土を伝って沢にあつまり，沢から小川を流れ，川の支流にあつまり，本流の最上川にあつまることになる。したがって，斎藤の表象において五月雨は，川の周辺の山々という広大な地帯に降り注ぐものとして現われていると考えられる。言い換えれば，斎藤は，芭蕉が「川のほとり」や「橋の上」や「舟の上」で実際に眺めたり観察することのできる五月雨ばかりではなく，芭蕉が眺めることも観察することもできない広大な範囲に降る五月雨をも表象していると考えられる。

同時に，斎藤の表象においては最上川もまた，芭蕉が「舟の上」で眺めたり観察することのできる範囲を越えて，「沢」から「大きな川」に到るまでの最上川がとらえられている。すなわち，斎藤にとっての最上川は，「舟の上」で実際に眺めることができる最上川よりも，いっそう広大な流れである。

確かに，五月雨や最上川のこうした広大さは，常識や論理的な推論に基づくならば表象され得ることである。だが，斎藤は，五月雨や最上川の広大さを，常識や斎藤自身の知識や論理的な推論に基づいてとらえるているわけではないと考えられる。というのも，斎藤は五月雨や最上川の広大さを，「『あつめて早し』の，この感じを言ってください。……『あつめて早し』とは，どういうことか」[30] という問いに対する一つの答えとして述べており，このことから，斎藤は五月雨や最上川の広大さを俳句の「あつめて早し」という言葉に従ってとらえていると考えられるからである。

もしもそうならば，斎藤は，日常的で素朴な態度においては，あるいは客観的な学問研究の態度においては，実際に眺めることも観察することもできないほどの五月雨や最上川の広大さを，常識や論理に基づく推論や推量を介さずにとらえていることになる。ハイデッガーの言葉で述べるならば，斎藤は俳句の言葉を通して，五月雨や最上川の広大さに襲われているといえる。そうすると斎藤は，日常的で素朴な態度や客観的な学問研究の態度から身を引き，この俳句に従って思索することによって，芭蕉と共に旅（Fahrt）に出て（er），その途上で芭蕉を真に襲ったことを共に経験しているのではないだろうか。そして斎藤は，このことを子どもたちにも経験させようとしているのではないだろうか。また斎藤は，このことを可能にする一つの方法として，「芭蕉はどこにいるか」という問いを子どもたちに問うているのではないだろうか。

しかしながら，芭蕉がどこにいるかという問いと，この俳句に従って思索することとの関係，あるいは芭蕉を真に襲ったこととの関係は，授業における子どもや斎藤の言葉ではいまだ不明確である。そこで，このことをいっそう明確に言葉にもたらしていると考えられる，芭蕉の同じ俳句についての評者による対話を取り上げ，考察してみることにする。

Ⅲ．詩に従って思索すること－評者の対話に即して－

A．俳句の成立過程

本章で取り上げる，評者たちの対話[31]は，芭蕉の俳句，「五月雨をあつめて早し最上川」についてなされたものである。この対話では，この俳句を読むに際して，この句において表現されている最上川を，芭蕉が岸あるいは橋から見ていることを前提とするべきか，それとも舟中から見ていることを前提とするべきかが議論される。この議論は主に，安部能成，太田水穂，小宮豊隆，そして和辻哲郎の間でなされている。安部と太田と小宮は，岸や橋という立場であり，和辻は，舟中という立場である。彼らの議論はやや込み入っているので，丁寧に追っておきたい。議論は，次のようにはじまる。

安部はまず，この句の出典と成立過程について述べる。安部によると，この句は，『奥の細道』『句選年考』『雪まろげ』の文献に載せられているとされる[32]。『奥の細道』では，「左右山覆い，しげみの中に船を下す。是に稲積みたるをやいな舟といふならし。白糸の瀧は青葉のひまひまに落て，仙人堂岸に臨みて立ち，水漲りて舟危ふし」[33]という地の文に続けて，この句が載せられているとされる。また，『句選年考』では，この句は歌仙の発句であり，次に一榮が「岸に螢を繋ぐ船杭」という脇の句をつけ，次に曾良が「瓜畑いざよふ空に月待ちて」[34]という第三の句をつけているとされる[35]。

『奥の細道』によると，この句は「羽黒登山の前，五月の末」に創作されたことになり，しかも芭蕉は「大石田で日和を待ち，雨が上がってから最上川を下った」ことになると安部は述べる[36]。ところが，『句選年考』『雪まろげ』によると，この句は大石田の高野平左衛門，別名一榮の宅での作となり，この句は「最上川を下る舟中の作ではなく，その前に詠んでいた」[37]句になるとされる。そこで安部は，この句は大石田の一榮亭での歌仙で詠んだものを，『奥の細道』の紀行文の体裁を重んじて，大石田を去った後の最上川での句にしたのだとみなす。なお，議論の中でも指摘されるように，『句選年考』『雪まろげ』では句は「あつめて涼し」となっており，『奥の細道』では「あつめて早し」となっている。

以上のことを指摘した後，安部は，「最上川の急流，稲舟の勢いよく下る所，山の青さ迄見る様です」[38]と述べる。安部のこの言葉だけからでは，安部が，芭蕉が岸あるいは橋にいることを前提としているのか，それとも舟中にいることを前提としているのかはいまだ明らかではない。

そこで和辻は，この句を「舟で下ってから作った句と見たい」と述べ，この句が「舟中の印象」であると述べる[39]。和辻のいう「舟で下ってから作った」ということは，句の成立の事実的な事情を意味しているわけではない。つまり和辻は，先に安部がこの句の出典を基にして指摘したこと，すなわちこの句が最上川の川下り以前の大石田で詠まれていたという句の成立の事実的な事情に反駁しているのではない。そうではなく，和辻は，句の成立の事実的な事情とは無関係に，この句を「舟中の印象として鑑賞」[40]することを主張しているのである。和辻は，この句を舟中の印象として鑑賞するほうが「面白い」[41]と述べる。そして和辻は，芭蕉もまたこの句を「舟中の印象として鑑賞されることを要求している」[42]と述べる。この主張の根拠として和辻は，「芭蕉が奥の細道に，左右の山の景色をかき，『水みなぎりて舟あやふし』として，直ぐ次にこの句をのせた」[43]ことを挙げる。和辻に従えば，芭蕉は「舟に乗る前は『涼し』と見ていた」[44]が，「河を下ってから『早し』と訂正した」[45]のである。

ところが，和辻の解釈に対して，安部は，「舟中の作だと決めなくても，岸や橋から見た感じとしていいでしょう」[46]と述べ，舟中の印象と決める必要はなく，岸や橋から見た印象として鑑賞しても差支えないとみなす。安部のこの意見に太田も賛同し，「舟に乗らなくても最上川の迅さはわかる」[47]と述べる。

B．評者の経験

では，和辻がいうようにこの句を「舟中の印象」として読む場合と，安部や太田がいうように岸や橋から見た印象として読む場合とでは，この句を読むときの読み手の経験は如何に異なるのであろうか。このことを以下，それぞれの評者の言葉に即して考察することにする。

和辻は，「大石田辺で見た景色」は「狭い」と述べる[48]。大石田辺の景色とは，芭蕉が舟に乗った場所の周辺の景色である。確かに，「大石田辺で見た景色」といわれるだけでは，芭蕉が舟中で見た景色のことなのか，それとも川の岸や橋から見た景色なのかは定まらない。だが，ここで和辻が問題としていることは，芭蕉が「最上川の早さの中に浸っている」のか，それとも「川と離れて川を見ているのか」ということである[49]。したがって，和辻のいう「大石田辺で見た景色」は，芭蕉が大石田辺で「見た」景色であり，岸や橋あるいは舟の中であっても，芭蕉が「見る」という営みをしているときに芭蕉に現われた景色のことと考えられる。そして，和辻に従えば，芭蕉が「見た」景色は，「狭い」のである。

だがこごて，和辻のいう「狭い」が，如何なる意味であるかが問題となる。和辻のいう「狭い」とは，視覚によって感性的に知覚されるいわゆる物理学的な空間の，幅や奥行きが狭いことを意味すると一見思われる。和辻は，芭蕉が大石田辺で見た景色を，『奥の細道』の地の文を引用しつつ，「左右山覆ひ青葉のひまひまに白糸の瀧の落ちるという様な景色」[50]と述べる。和辻に従えば，芭蕉が大石田辺で見た景色は，左右を山に覆われているような景色である。このことから，確かに，大石田辺で見た景色は，左右の山に覆われ，視界が遮られているという意味で「狭い」とみなすこともできる。だが，和辻がいう「狭い」とは，このような意味での狭さを意味するだけではないと考えられる。このことは，和辻の言葉をさらに考察することによって明かとなる。

和辻はさらに，大石田辺で見た狭い景色の中で舟を「非常な早さで下して行けば」，「最上川というものが，五月雨に浸された長い，深い，重なった山々を縫って，えんえんとしてうねっている大きい流れとして印象される」と述べる[50]。ここでもまた，和辻がいう「長い」「深い」「重なった」「えんえんと」ということが，如何なる意味なのかが問題となる。確かに和辻は，芭蕉の視覚によって感性的に知覚されるいわゆる物理学的な空間に注目し，大石田辺で芭蕉が見た「狭い」景色と，舟中で芭蕉が見た広い景色とを対比している，とみなすことも可能であろう。

だが，このようにみなすならば，上記の和辻の引用文に続く，「そこで『五月雨をあつめて』も，『早し』も，共に利く」[52]という和辻の言葉は，適切に解釈できないことになる。特に，「そこで」という接続詞，あるいは「共に利く」という言葉は，曖昧な言葉とみなされてしまうことになる。それゆえ，和辻のいう「狭い」あるいは「長い」「深い」「重なった」といった言葉の意味を，いわゆる物理学的な空間に注目するのではないような仕方で解釈することが必要となる。

芭蕉が景色を見ているという前提に立つとき，和辻によれば，「大石田辺で見た景色」は「狭い」と感じられる。ここで和辻は，芭蕉が大石田辺で見た景色を表象している。左右から覆いかぶさってくるような山々，その山々は夏の青葉で彩られ，山の或る所，あるいはいたる所で青葉の隙間から，細い瀧が，あたかも白い糸のように飛沫を上げて落ちている。このような景色が，『奥の細道』の地の文によって，和辻の表象に立て渡されると考えられる。だが，第一章で考察されたように，ハイデッガーに従えば，事物を表象へと立て渡すことは，事物の本来の現われの場を立て塞ぐことである。それゆえ，大石田辺の景色が和辻の表象に立て渡されるとき，同時に和辻は，この景色の表象によって，あるいはこのような景色の中の山や青葉や白糸の瀧といった様々な事物の表象によって目を奪われ，和辻にとっての事物の現われの場は立て塞がれてしまうと考えられる。こうした理由から，芭蕉が大石田辺で見た景色は和辻には狭いと感じられるのではないだろうか。もしもそうならば，和辻がいう「狭い」は，単にいわゆる物理学的な空間の狭さを意味するばかりではなく，見る者の自由が奪われ圧迫されること，いわば狭苦しさをも意味することになると考えられる。

他方，和辻は，芭蕉が舟に乗って最上川を下っているという前提に立つときはには，「最上川というもの」が，「えんえんとしてうねっている大きい流れ」として現われると述べる。ここで和辻は，「最上川が」とは述べず，「最上川というものが」と述べる。

「という」とは，辞書によれば，「と呼ばれている」「という名の」を意味する（大辞林）。したがって，「最上川というもの」という和辻の言葉は，「最上川と呼ばれているもの」と言い換えることができる。和辻は，「最上川というもの」という言葉によって，「最上川」と名づけられ通常我々に知られているもの，すなわち「最上川」という名前によって我々の表象へと立て渡されているものを意味していると考えられる。

和辻に従えば，「最上川というもの」は，すなわち最上川という名前を通して通常表象されているものは，芭蕉の句を舟中の印象として読むことによって，「えんえんとしてうねっている大きい流れ」として現われる。この「えんえん」とした「大きい流れ」は通常最上川という名前で我々によってとらえられていないような大きい流れである。それゆえ，和辻のいう「えんえんとしてうねっている大きい流れ」は，単にいわゆる物理学的に長い流れを意味するばかりではなく，最上川という名前によって通常は塞がれているところの事物の本来の現われそのものを意味していると考えられる。ハイデッガーがいうところの，見る者を乗り越え圧倒するような現われそのものを，和辻は「えんえんとしてうねっている大きい流れ」という言葉によって示そうとしていると考えられる。

このような最上川の圧倒する現われそのものは，芭蕉にこの俳句を創作せしめたところの，芭蕉を真に襲ったものではないだろうか。もしもそうならば，和辻は，ハイデッガーの言葉で述べるならば，芭蕉の俳句に従って思索することによって，芭蕉を真に襲ったものそのものへと，すなわち芭蕉が句で「最上川」という名前を改め

てそれに与えたところの「大きい流れ」そのものへと遡ろうとしていることになる。

しかも和辻に従えば，このような「えんえんとしてうねっている大きい流れ」は，「最上川」を舟で非常な早さで下るとき，経験され得るとされる。最上川周辺の景色を，岸や橋から見ているときには，見ている者は，景色や景色の中の様々な事物を表象してしまいがちであり，表象された景色や事物に目を奪われ，そのために見る者の自由が奪われてしまうことになる。ところが，長らく降り続いた五月雨によって増水した最上川を，舟に乗って，非常な早さで下るならば，下っている者には，周囲の景色や景色の中の諸々の事物を表象する余裕は与えられないことになる。しかも，『奥の細道』の地の文には「水漲りて舟危ふし」と書かれており，川を下る芭蕉は平静な気分で周囲の景色を眺める余裕はなく，むしろ恐れや不安の気分において川の早さの中に浸っていると考えられる。それゆえ，舟で下る者は，景色や事物によって目を奪われるどころか，「最上川の早さの中に浸」り，最上川の早さに身を任せ，いわば最上川のえんえんとしてうねっている流れそのものに真に襲われることになると考えられる。このとき，最上川の早さの中に浸る者には，通常名づけられているところの「最上川」が表象されるのではなく，「えんえんとしてうねっている大きい流れ」の早さそのものが，舟に乗っている者を圧倒するような仕方で襲ってくると考えられる。

先にも引用したように，和辻は，最上川がえんえんとしてうねっている大きい流れとして印象されることに続けて，「そこで『五月雨をあつめて』も『早し』も，共に利く」と述べる。「利く」とは，辞書によれば，或るものの作用や働きが発揮されることを意味する（大辞林）。先に考察したように，ハイデッガーに従えば，語は，詩人を真に襲ったものをつかみ得るものにし，ぎっしりと存在に満ちたものにするという働きをもつ。このことを手がかりとするならば，「五月雨に浸された長い，深い，重なった山々」を縫って流れる「えんえん」とした「大きい流れ」に，芭蕉と共に襲われるときはじめて，句の『あつめて』や『早し』という語が，通常はつかみ得ないものをつかみ得るようにしていることを見て取ることができることを和辻は指摘していると考えられる。いっそう詳しく述べるならば，『五月雨をあつめて』という語は，「長い，深い，重なった山々」に降った五月雨が一つの流れに集合していることをつかみ得るようにし，このことをぎっしりと存在に満ちたことにする。また，『五月雨をあつめて』という語と『早し』という語が結びつくことによって，これらの語は，「えんえんとした大きい流れ」をつかみ得るようにし，存在に満ちたものにする。逆に，芭蕉を襲ったところのこの大きな流れに共に襲われることがないならば，『五月雨をあつめて』や『早し』という語が，何をつかみ得るようにし，存在に満ちたものにしているのかは曖昧なままになる，和辻の言葉で述べるならば，それらの語は利かないことになるのである。

以上，和辻の言葉から，この句や地の文についての和辻の経験の可能性を考察した。次に和辻の解釈に対する安部や小宮の反論を考察することによって，芭蕉が川の岸や橋にいるとみなすことによって，読み手には如何なる経験が生じるのかを考察することにする。

芭蕉は舟中にいるとみなし，芭蕉が経験したような仕方で，最上川の現われを経験しようとする和辻に対して，安部は，「あくまでも［芭蕉を］舟の乗らせる気ですか。乗らなければ早しは出ないということはないじゃありませんか」[53] と反論する。また，太田も，「舟に乗らないでも最上川の迅さはわかる」[54] と反論する。

先にも引用したように，安部は，この対話のはじめに，「最上川の急流，稲舟の勢いよく下る所，山の青さ迄見る様です」と述べている。安部は，『早し』という語から，「最上川の急流，稲舟の勢いよく下る所」を表象している。そして安部は，「これだけ素直に言って味を出すのはえらいと思います」[55] とも述べている。したがって，安部は，最上川の急流や稲舟が勢いよく下る光景を，単なる無味乾燥なものとしてではなく，味わい深いものとして表象していると考えられる。

また，太田は，「雨後の晴れた日に水が矢の様に行く様を直覚します」[56] と述べる。

さらにまた，小宮は，芭蕉が岸あるいは橋から最上川を見ているという立場を擁護して，次のように述べる。すなわち小宮は，「雨上がりに石切橋辺に行って見ると，ふだんは水があるのかないのかわからない様な江戸川が，濁流滔々と物凄い様に流れている，『五月雨をあつめて早』い最上川は，舟で下るなんていうことが迚(とて)も考えられそうもない気がします」[57] と述べる。ここで小宮は，雨上がりの江戸川を表象している。小宮は，「石切橋辺」で，増水した「江戸川」を実際に目にしたことがあるのであろう。小宮は，小宮自身が実際に目にしたであろう増水した「江戸川」を表象することを助けとして，「五月雨をあつめて早い最上川」を表象し，増水した最上川を「濁流滔々と物凄い様に流れている」と表現している。

しかも小宮は，増水した川を舟で下ることはとても考えられないとみなす。ここで小宮は，何らかの目的をもって実践的に行動する日常的な態度における推論に基づい

ていると考えられる。そうすると小宮は，句において表現されている最上川を小宮自身の体験や日常的な態度における推論・推量に基づき表象していると考えられる。この場合，最上川は，ハイデッガーがいう意味での襲うという仕方で現われるわけではなく，迫力のある川としてあたかも感性的に知覚されるかのようにいわばありありと表象されるのである。

以上のように，俳句の言葉の開示力に従って，芭蕉自身を襲ったものそのものへと遡ろうとする，すなわち俳句に従って思索しようとする和辻と，俳句で表現されているものを読み手の体験や知識や推論に基づいてありありと表象する安部や太田や小宮とでは，『五月雨をあつめて』や『早し』という語あるいは句全体の経験の仕方の豊かさの次元，さらに，この俳句で表現されている最上川の現われ方の豊かさの次元は異なるといえる。そして，和辻が指摘しているように，芭蕉を襲ったものに共に襲われるためには，芭蕉が舟上にいるとみなすことが必要となるのである。

おわりに

本稿では，ハイデッガーの思索に基づき，詩に従って思索するという在り方を提示した。そして，この観点を導きとすることによって，芭蕉の俳句を教材とした授業において斎藤は俳句に従って思索していること，また俳句に従って思索することを子どもたちに促していることが考察された。そして，「芭蕉はどこにいるか」という斎藤の問いは，俳句に従って思索することを子どもたちに可能ならしめる問いであることが，評者の対話を手がかりとすることによって示唆された。

ハイデッガーが明らかにしているように，また本稿でも考察されたように，詩に従って思索する場合には，詩人を真に襲った驚くべき事柄が開示されると考えられる。そして，こうした事柄の開示こそは，詩を学ぶことにおける豊かさの一つであるのではないだろうか。だが同時に，詩の読み手がかつて経験したことのないような事柄や，論理的な推論によっては得られないような事柄を読み手が経験しなければならないところに，詩を教材とした授業の難しさの一つもあるのではないだろうか。

（指導教官　中田基昭助教授）

注および引用文献

1) Heidegger, M.1959[9] "Unterweges zur Sprache" Gunther Neske Pfullingen, 三木正之訳「詩と言葉」1963，理想社，S.220 訳pp.85-86参照。
2) a. a. O.,221, 224, 228, 231, 237, 238 訳p.87, 88, 92, 98, 104, 114, 115.
3) 本論では，ドイツ語の単語の意味を考察するに際して，相良守峯編『大独和辞典』博友社を参照した。本論では以下，特に断らないかぎり，ドイツ語の単語の意味は，『大独和辞典』を参照している。
4) a. a. O.,225 訳p.93.
5) a. a. O.,225 訳p.93.
6) Heidegger, M.1957[5] "Der Satz vom Grund" Gunther Neske Pfullingen, S. 140f.
7) Heidegger 1959, S.225 訳p.93.
8) a. a. O.,225 訳p.93.
9) a. a. O.,225 訳p.93.
10) Heidegger, M.1971 "On the way to language "translated by Perter D. Hertz, Harper Collins, p.144.
11) Heidegger 1959, a. a. O.,225 訳p.93.
12) Heidegger 1959, a. a. O.,225 訳p.93.
13) Heidegger 1959, a. a. O.,225 訳p.93.
14) 斎藤喜博　1977「わたしの授業　第一集」一莖書房，19-40頁。
15) 同上　28頁。
16) 例えば，以下の授業で，斎藤はこうした問いを子どもたちに問うている。
山村暮鳥『こども』を教材とした授業（斎藤，前掲書，174頁参照。）
室生犀星『ふるさと』を教材とした授業（斎藤，前掲書，203頁参照。および斎藤喜博1977「わたしの授業　第三集」一莖書房，82，83頁参照。）
坂本遼『春』を教材とした授業（斎藤，前掲書，38頁参照。および斎藤喜博1978「わたしの授業　第四集」一莖書房，220頁参照。および斎藤喜博1977「介入授業の記録　中」一莖書房，86，114頁参照。および斎藤喜博1978「続介入授業の記録」一莖書房，105頁参照。）
百田宗治『怒っている海』を教材とした授業（斎藤喜博1978「わたしの授業　第四集」一莖書房，93頁参照。）
山村暮鳥『雲』を教材とした授業（斎藤，前掲書，121頁参照。）
与謝蕪村の俳句を教材として授業（斎藤，前掲書，166-167頁参照。）
村野四郎『鹿』を教材とした授業（斎藤喜博1982「わたしの授業　第六集」一莖書房，115頁参照。及び斎藤喜博1979「介入授業の記録　下」一莖書房，40頁参照。）
まどみちお『いなご』を教材とした授業（斎藤喜博1977「介入授業の記録　上」一莖書房，78頁参照。）
草野心平『春のうた』を教材とした授業（斎藤喜博1977「介入授業の記録　下」一莖書房，116頁参照。）
室生犀星『蝉頃』を教材とした授業（斎藤，前掲書，188頁参照。）
17) 斎藤喜博　1977「わたしの授業　第一集」，28頁。
18) 同上　29頁。
19) 同上　29頁。
20) 同上　29頁。
21) 同上　29頁。
22) 同上　29頁。
23) 同上　29頁。
24) 同上　30頁。
25) 同上　30-31頁参照。
26) 同上　30頁。
27) 同上　30頁。
28) 同上　31頁。
29) 同上　31頁。

30）同上　31頁。
31）幸田露伴他　1924「續　芭蕉俳句研究」岩波書店，258-262頁。なお，この対話からの引用に際しては，旧字体や旧仮名遣いを，新字体や新仮名遣いに改めることにする。
32）幸田他，前掲書，258頁参照。
33）同上　258頁。
34）柳田國男によると，この句は曾良自身が後に書き改めたもので，もとは「瓜畑いさよふ空に影待ちて」であったとされる（柳田國男1990「柳田國男全集　25」ちくま文庫，379頁）。
35）幸田他，前掲書，258頁。
36）同上　258頁。
37）同上　258頁。
38）同上　258頁。
39）同上　259頁。
40）同上　259頁。
41）同上　259頁。
42）同上　259頁。
43）同上　259頁。
44）同上　260頁。
45）同上　259頁。
46）同上　259頁。
47）同上　260頁。
48）同上　260頁。
49）同上　259頁。
50）同上　260頁。
51）同上　260頁。
52）同上　260頁。
53）同上　260頁　［　］内引用者。
54）同上　260頁。
55）同上　259頁。
56）同上　261頁。
57）同上　260頁。